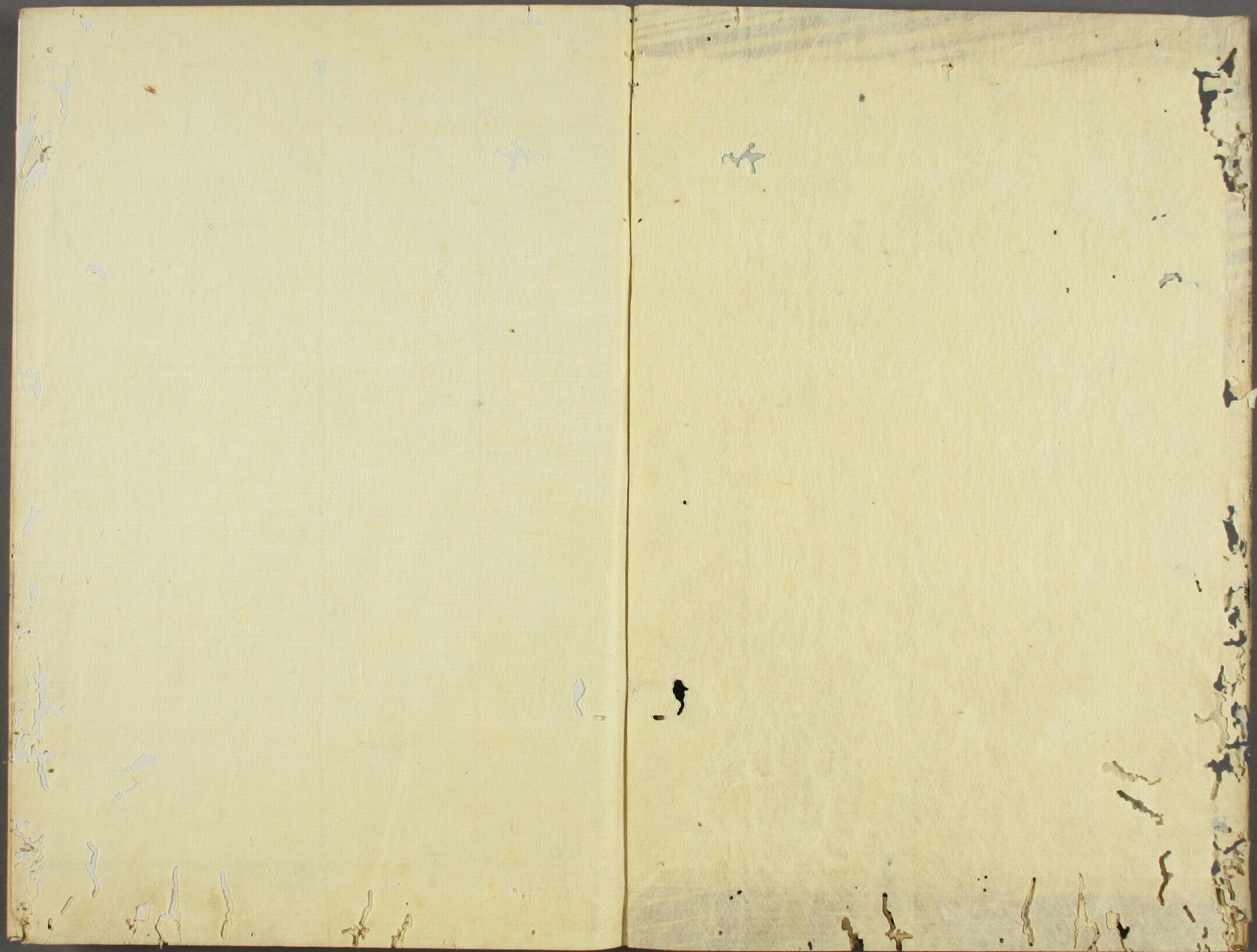




源
注
拾
遺

五
六







源註拾遺卷第五

梅枝

藤末葉

若菜上

同下

かゝる木

横笛

鈴心



とてをけふもなり如意輪観音の御札を頼
成におまゝの御思惟の御札を頼
おまゝもみかへ頼あり

藤末葉

一 わよーとひまーふとひまーのり

○今梅世の常よハ相思とぬと片恋とひわを
法急とまとはん舞ハ内大信よとけひと
くむらひまののハ中替まおれと
あせしとひまーふとひまーの法急と
うらーのひまーと

○今梅

一 わよーとひまーふとひまーのり
一月のつらさ

○今梅こもハ七日のつらさ

朔日二日乃ついでにあらあはれ卯月のなつらふらふ海
なりはかしくいふと萬葉集第六二日月のなつらふと月
をらてふと三月とふれと

一 丁記ありてありけりありて恨

○今接けりい真なる源氏のこゝろをいひて内府乃
ゆききくろく一と身の内なる人言ふゆふ ことごと
それ末通女老よみえりてゆききいふと中
叶らばやそと下はつらげりて少て知海一
なりてのりて

○今接孔子説きてふふりていふこととては儒道
なり

一 辰のうゝ葉のうゝらとていふる

河をりてありてのうゝ葉のうゝらとていふる 昔の葉と
いふる

○今接万葉集第十四巻一首

春(葉)のうゝ葉のうゝらとていふる 春(葉)のうゝ葉のうゝらとていふる
は結句いふらとていふる 後撰の一首とていふる
ていふる 新記のうゝ葉のうゝらとていふる
咲と申海まらとていふる
あゝの記とていふる

蘆垣 催馬樂云云

○今接まらとていふる ミナトヨコシと申詠つらとていふる 詠の
字日本紀并万葉よとていふる

孟津は暮しる家なりとありしは、
いふこととありしを先記をわりの合するは、
此婦婦といふは、又車なるものなり、
つらぬぬし先といふは、
妻は、
和名は、

一 丁つてんをいひしは、
驚かすなりしは、
に返のえとをいひしは、
いへるなり

○今接は、

うたのうりよのてんは、
いふに、
とて、
本後記の宣命は、
ほし、
か、
一

細六帖

○今接は、
うたのうりよのてんは、

突つていふよきたの関といふてう能因奇枕と今
乃世流布と小菊多しかおてらうとよむじ信と
きくといふと河死集宗徳院沖新石

母ふんまよきくは美言色は下比あし月ありのあしう
奇の心とあまに秋あつらへてせうしよあし信と
内厨とくびの関のくたしくもう流いてつれ
うくちうー流いさうーあまあふり今戸てうあ
里つは流よまられまらのあえだなりたむと
かまうた信とさうまふおほとひあまを福と綱
すれ志見奇

やうとさるあひのえれんま日地はあまはあまをせらるん

世とのがしんハ将萌とてえんじへる句ハ信せてあ
るんよをほそくあまのらううりあ也新ふらとよ下の
なんお終るは或はあまのたうこよら内厨まこ
あまあせうあまハあまらんとまうとあう
あまん人まこくは

○今梅河塚集よ

あまこれあまもあまはあまとあまはあまはあまは
いよ向の河死あまらう

一 くりん佛あそまうて

○今梅灌佛の佛像と出すといふわハ将率[#]これ[#]

らの字あり

一 かしこくしつとくしつとく

○今接指遺集雜意は灌佛のまゝに張るる

よふ人よふ人

わが衣のしるをふる水もて我神のまゝのや何はれ
但乞に世中の灌佛あり

一 おもとくやうふのかきよ

○今接かつみけの且身作しるにわたりくぬのまゝ
よふにふたふたのうらなり浮世の世は

天雲のしるをふる人のまゝにふたふたのうらなり
とある所らお似たり新に今雜下し

皇嘉門院

何れやふたふたのうらなりふたふたのうらなり
この哥乃河をわたりたふたふたのうらなり

一 かねてしつとくしつとく

○今接まゝ水は真清水もてまはほめたるなり
和名云日本紀云妙美井豎又二帖

我のいふしつとくしつとく水の清きそわたりまはほめたるなり
とあるはしつとくしつとく

一 おもく人の歌しつとくしつとく

○今接つとくしつとくしつとく詩も波心池
心谷心すしつとくしつとく谷のうらなり

井の心とていふ一むしう人交をぬてらとせ
流り一今井のられしつとてやあてらとせ
とていふれゆとていふ一りよを改め信とせれは
いこ一のいこ一井の音し雲井屋のねは
あややとていふ一かていふ
一よかみのおは

河津のゆれをのいひつう一松がけは
○今梅の河津のいふるも業業二は

妹のいふはあれし娘鳥のいふれはまじとせ

若世草上

一 女のわとじつとてい

孟あしじくハ欺雁也たうかていふり

○今梅欺誰の誰と雁とされるハ暗記の失錯
すいほうらよねりいふえ流し屋きくもりてい

○今梅まらハ信よま信する人といふと
りるれとていふ言は信するを真言といふ道と
知人ハかすハ心し言とおあてて其ハ信する中
よんち知るれ物なり言ハ信して知る信する
とていふとていふ誠信等の字ハ心の信するといふ
言ハ双てはていふ言ハ信する

一 乳ほくふりく

○今梅ほくハ朗の字ト今よ志のめのはく
くよあけゆちとよえちと是又紫式の家集
らちのひおけをわをいあめれおふまると
やめとみく

○今梅和名鈔云鰥夫釋名云無妻曰鰥古頑及和名夜無字

鰥々然不寤如魚目恒不閉者也又云親名云無夫曰寡

和名夜無女玉篇云寡或曰孀霜曰孀婦孀裡やじとやじめ

よまらていとけ若おれめとじくはとゆめ
あてあてしあきてやのとしかあつと

一 にくふおとやあをせすん

河か○てらつてさあはかさんよふおとあつたれ

○今葉此新あはあつとくはあつた

一 中納言りし年わくわくしれやうな色しあつた
とあつて今とつしあけの所うらうらとあつた
ぬまにひされおれはもたあつたよあつた
よあつた

○今梅いよあつたハ似あつたあつた

一 いまはあつた

細威勢あつた

河いよあつた

○今梅つま〜
河海より糸〜
だらけ〜
くあれも息を巻と〜

一 内侍の〜
河集 日本紀

○今案是ハ河海の撰之集ハ〜
とつと追〜
と〜

一 河いじ〜
○今梅日本紀第廿一云善信阿尼等謂大臣曰出家

之達以戒為本願向百濟學受戒法

一 け〜
河人の世の老と〜
○今梅朝忠集より

○今梅朝忠集より
心おとかがい〜

一 河す〜
○今梅梅のり〜

乃奇宴わ〜
か〜
は〜

ゆかりと道雅之位の奇乃のふしと云ふあり

一 又その是と云ふは少とありぬ月日

○今梅金葉集巻上より藤原惟規

池すすじ成るととてのそとぬれと云ふやと云ふは
い奇しきと推規は紫式部より又菅家万葉より

わめつら成るととてのそとぬれと云ふは
ぬれと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

一 河希と云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
かすありと云ふはと云ふはと云ふは

○今葉後撰集雜四亭子院よりと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

いせの海は年々へはと云ふはと云ふはと云ふは
又雜一云は法皇はと云ふはと云ふはと云ふは
治ふありと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
ひと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
かへと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
おかしと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

一 人のくらしと云ふは

人中はと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
○今梅金葉集巻上よりと云ふはと云ふはと云ふは
と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

ゆあなり又同師女

一 かくるよりいして見よしうやうする

○今按禮記問喪篇云禮義之經非從天降也非從地出也人情而已矣 和名采式部奇よ

一 けりくさるるはさうはさうあはさうさあさうなるに
かろしうよりけしめ

河壁代又防壁

○今按和名鈔云釋名云縛壁以席縛著於壁也漢語鈔云防壁多都縛壁と防壁もその名なりと云み多壁代はなしうする

一 らてんのうしゆいよりひ

一 ○今按日本紀弓矢二具フツヨロヒ
ゆはるつき

○今按精略日記よしれき中おれはかくてやじやうもわりれしとたりはさうてなりしを
かたいてし日つひしゆつきのめはくれしあり

一 人よりしれをくよりなきひきぬ

○今按千載集雜上と云つ院より六十かまといひあひ守ぬ時後侍る 法成寺入道前をぬたは
かたしうさるるせいの谷れねやまといふし

又業式が家集よ

同云

一 ありあけの世のいひあはれしうらみのいふはなほながしき
一 東のうらやまにぬるうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

○今梅後撰よ

兼備朝臣

一 梅のあけはしにさゆのまはれは風波もそまきく
一 ぬらくらうらやまのうらやま

○今梅のいひあはれしうらみのいふはなほながしき
半はそいひ乃きせおひひがたさう

一 命にそいひ乃きせおひひがたさう

○今梅余らうはゆをねぬれぬる朝あははあ
まるといひあはれ世のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

一 中乃其あはれおとほ通るゆめあはれしうら

一 品物あはれおとほ通るゆめあはれしうら

○今梅の業式第一曲よ

一 かくそくはひけりもあはれはゆき^はさう^去あはれし
一 ことあはれしうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

河六帖

○今梅世川河六帖よあはれしうらやまのうらやまのうらやま
いふはなほながしき

よふ人あはれし

いそしきあはれしうらやまのうらやまのうらやまのうらやま
いそしきあはれしうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

又後撰子

信明

一 けふのやうよそかりりやわのひの川あまふくはるあ
反中の雪のほのふたはれらよよ

○今梅家持集よ

おののきと死るも梅えよな戸の言を死えのころき
黄之集一

梅の死るもなや今しは山と友戸の言のふる
詩人玉屑は後雪の事よ侍伴とらひはるまよ
よき影の也しれ侍伴差明可い倍作といへる
唐の世よりるる河をけいももつてよあれ死

おのつゝいわををらよや

一 これもわまのころらぬが

○今梅古今よ

わんはふはわまのしはまよまよとれはひあえ
けり心よゆみあかきまのこまあれ
なとてくおらぬはれたはるはひん

一 河今た考ることらけるはよわのしとひこる
よし張移しきてかこいふやうなり

○今葉只考ることらぬ一世物語もわらわ
可なりふとはけいはひまよるの准すといふあ
新おはるる道一

竹の節はわくや唯張るる女人の人々竹を
わけてる汗をかきしりてはひきつる時
上を越すておつるにわたりもも
ほらぬといひあうりてみれゆめあり
旅遠物置よえ浦の馬せしり張かり
人の車ねはくも危き物見さる前
おつるをいりて人たはまをねり
いそあつてけきは馬くらひておち
わつとれははとこねはといおつる
いあつてといおちもわう於此に
おつるのを月夜に雁をたつぬ
い

迷ひねり

一 いくこのけいさるるあつて

○今葉

まはれし春張るるあつて

一 しまいりりりり

○今梅

やほのしとこやまもれも

一 身はらくちやまわ

○今梅

秋のそよ風ふりしあつて
ひ歌うるあつて

新古今恋みよ思ふ事はつらぬめくたれひくふく
事よふはゆき

六條右大臣室

あふらく事よき物と色つら秋とははたしめし

こきばけ今の奇蹟なてよみだすしん

まを葉山はつたにふいふ所よあは古事記の垂仁

天皇の降もと品遅別命出雲の人社よ法皇の

事とつらあよ出雲國造之祖名岐比佐都美飾

昔葉山而立其河下將獻大御食云々

あふらのま羽はあも

○今梅を葉山は

秋の露がうしあふら水よのま羽のふりきはくをハ

ふに水もといふハ務也葉の奇よま葉のいところあふ

よあふま葉山は色うぬ務のまねよあふし人

あふらま葉のま葉の色をうしあふらあふし人

あふらま葉は葉の下葉よま葉うしあふらあふし

あふらま葉のま葉の色をうしあふらあふし人

秋露のま葉をけく今ま葉あふらあふし人

今あふ秋

けいそらあふらあふらあふらあふらあふらあふら

千載冬

あふらのあふらあふらあふらあふらあふらあふら

い二首まきこの奇蹟なてよみだすしん

一 日記に物とひまのふはやうにおよすけ流る

○今梅信より川乃流るやうもいふらうにせよとの返
のふはよ御まう

一 おまらふしてつしほがうとて今わらふはるま

○今梅精體日記云た下のまうに返さうあつてく
あつてつらうとて海せんかといふと今わらふは
よまこわしとてくこら河あつこれに精體一延花式
筆の八の噪の字返さくともよふと返ま古流といふ
はくくく又物流るのにさうせられたといふ河も
さういふらうよりの言返さくこら流後のくあくく
を返らめては河もや

一 あーいよあふらうあつら

○今梅あとかと通一てかーこらあ同ー
これ文とさすかこらめらとまうて

○今梅れ文がさういふあかていふあかて又
白讀もいふあかたはさういふあか

一 おはらああてかあひわひの流るはあかていふ

○今梅けたほらけらあつてのあはあはらけら
よまきあまはあはらけらにさういふあはらけら
細流よおほらけらあまはらけらとてあはらけら
あはらけらとてあはらけらあまはらけらとてあはらけら
あはらけらとてあはらけらあまはらけらとてあはらけら

いしりかたのなまひわひのきくはなまひわひして
まふとの魚かまひしてわひなまふとの魚は
人やまふしきまねとみかぬしと

○今梅葉のよあらしらこらこらこらこらこら
もこれまもあまてあまこらあまこら
いしりかたこらこらあまこらこら

盃思ひくもまのまのまのまのまのまのまのまの
○今梅葉氏のおまふらまはてはなまふらま
わらわら

こまこらこらこらこらこら
○今梅よまこらこらこらこらこらこらこらこら

いしりかたのなまひわひのきくはなまひわひして
まふとの魚かまひしてわひなまふとの魚は
人やまふしきまねとみかぬしと

○今梅葉のよあらしらこらこらこらこらこら
もこれまもあまてあまこらあまこら
いしりかたこらこらあまこらこら

盃思ひくもまのまのまのまのまのまのまのまの
○今梅葉氏のおまふらまはてはなまふらま
わらわら

こまこらこらこらこらこら
○今梅よまこらこらこらこらこらこらこらこら

今のいふ所新なりみられたるものといふて来しといふ事
入くといふ事皆ありしよしすりしり
夫木抄字は御會は契多春

京極園白

ちよまそとほてけしひささくさみきふふふふふふ

若菜下

一 今梅日本紀第三云慨哉大夫云慨哉此云于黎

多棄伽夜 李善秋興賦注曰慨許既也 字林曰慨壯士不得志也

一 今梅後撰卷五 敦忠朝臣

一 今梅万葉下 郭云と中人厚紙遠津人分トあり

後撰也

一 納言の字はれくはほとあはなむいぬかよふらうりかへん
移りくさしいらうりけよまもりけ

花猫乃字音あう之移りハ五音通丁

一 ○今梅は沙汰付は是ハ猫めき夢今乃信く
にやとくともくともく我かくいぬはらひ平よんえさう
意もあ人のこみさうせいかまよ何そく移り
人のかこみさうせいか我ら知はゆは油は行も将寝
くとも信とておりよ人の我し移りしつあう
よ字かせらさる移り移りしつあうとつく
うとてとすしじれしけいあまら

細 我あまひとともしじりあり

○今梅は道よりよとくつげは和改よりしと
ともしじりなかにれりしじりとも人よとあしり
すじとはらうりてけしとじりきは猫めきより
移りくとも信とておりよ人の我ら知はゆは油は行も将寝
くとも信とておりよ人の我ら知はゆは油は行も将寝
あうりしき中よなうまもわきははらははら
そんかりおのめあり

一 人将もさう世のせりしきまら移り移りしきまら
○今梅はさういなり形之假令 の行はうれめし

下地といふはねあ

一 今昔の山ありと海ありとてすつとてしんととを

○今梅新葉芽て入麻呂妻歿之後哀慟作歌

おほこの乃ゆき人もひらりゆしひい云

第之巻石田王卒之時山前王哀傷作歌

河風のきえつとて波立つきみあつくと似る今もあや

一 かの花乃ゆらつく秋の葉はつれらけらめとれて

○今梅りれたてのてり法庵一おる一神月

中の十日とちにもいとあらくれら秋成きてや

いへりてと秋の末も是秋の葉とつれ秋とて

つとる葉をれとかくいやはこととと

一 山ありとすれら行のう

○今梅新葉芽 山之家

ちるとせし葉はれら行の末もこのかみかいら

い哥この詞とて海もつらうと

一 すこのえんぬいもあひあ

○今葉貝よとせら

一 うのまぬのしらくけらめたまえとてけりしやを

ほきそこのまわりとてい

○今梅は心にほむほむをらひよらてかけんも

新といふ

和名第十三祭祀具云本朝式云十一月辰日宴會其飲

器参議以上朱漆椀五位以上葉椀和語云久保天 是は准へ高
く有職はるぬるく下は尼君の御まゝもせり
りとしはるそこれより少と上はとびるるへ一に

一 馬とひ

○今按御者カムウラシヒ 日本紀

一 ぬれとゆひしりふ

○今梅人としておぼしうもいふはむいふあ
そふより争イシウツ 日本紀

一 いもわの御まけ

河齋 日本紀

○今案日本紀よんえんは

一 今のゆゑらしひ

○今按有意エラシライ 日本紀正八
天武紀上

一 今梅川とれは琴の縁の言よかあり
く海流すと川りき

一 今梅川とれは琴の縁の言よかあり
かゝるゝらとあめを丸巻きやして

一 今按あめは合憑といふ河のよく合漆が丸巻
ゆ心よとゆひあまのあまのあま

一 文のゆゑとりてをゆへまた
細く齋のふのそは給ふり

夕音のやうにいへる源のそはるふ

○今按細流よきうふくしき放りには案の上へいひ
そめよわあふんきふたうちきかき又あしかりえたりや
わんごうらたてがしあり源氏よあふん中明つなり
又明衣被橋よふくしきとさうてこれもうきりしふ
よるいしよくとんととあたふん今といふらん文よゆきこ
しつしちの月

細二月十九日なり

○今按福すらの月廿日より卧待おれしをれと
廿日より入き後續下今意こ

坂上是別

福てけいふの月乃ふあもあひうしと成つるすれじ

同雜上よ後多ね流くくぬよたし海もあつたの事
よさうしては日表のはまよりあつた打うあお付を
らまけきし

承仁法親王

つとら福すらの月乃ふあもあひうしと成つるすれじ
け二首明澄し

新勅撰意よ

殷富門院之輔

結ふられ福すらの月影とてゆきまはされあつた
ふまは福すらの河いあもことしあもの敷きもあつた
より十九夜とては流ありあつたや
風雅集意こは伏見院法時六帖部とて人くよき
よあつたあひあつたよ二夜あつたてとてあつた

希人納之為菊

春の空のたしき〜
こま二十九夜と移すら〜
ゆ〜

君の〜
十八夜と居待〜
まは〜

か〜
○今葉行勢〜

〜
け〜

一 春の空のたしき〜

○今梅葉の上〜

一 こと〜

○今梅け〜

一 あり〜

○今梅人の〜
〜
〜

人くのびくふきこむ事ありしに口元方よみ琴
こころを記さしに事一紙執るはらりし
れくこころを記さしに事一紙執るはらりし

一 ことごとくきこむれぬあはれを記さしに
○今梅夕音の案上の事一紙執るはらりし
いふ事あり

一 されしことよからしむる事あり
○今案記の字がたにいふ事一紙執るはらりし
よりいふ事あり
一 してふ法のやうにいふ事あり
一 後りのあはれを記さしに事一紙執るはらりし

細法の樂忌琴の事ありしに事一紙執るはらりし

○今梅琴の音の法り樂忌の事ありしに事一紙執るはらりし

一 一この世の事ありしに事一紙執るはらりし

○今梅今世の事ありしに事一紙執るはらりし

一 一これかへてやうに事ありしに事一紙執るはらりし

○今梅新古今雜下守世之法親王

なうて世の事ありしに事一紙執るはらりし
これららの事ありしに事一紙執るはらりし

一 はひよらるゝありてこゝありき

河よ流るゝもありといふ事あるは海の水の流るゝ流の流るゝ

○今葉舟行のまきて川をよき流るゝ

一 舟身とわらみく

河へもぬれぬるまありぬよの流るゝのまき流るゝ

○今梅小所集よ二二乃白とれりひよありぬ

よぬれありもいぬいと大なるれりもいぬれり

ふよとれりはいれり河海を流るゝ川をよき流るゝ

万葉よわらりいり河よ少集しかるりぬれり

美河とくもり

一 なるよまらつてんといらるゝ

河梅撫もいぬれりり之給合よあり

○今梅蜂吹るるも流るゝとれり

やうよとれり東坡云持虎者不能不吹蜂取云

一 いらるゝもいぬれりり

河深著 日本紀

○今梅日本紀よ深著と志しり先る事れり

美葉よ流るゝ字流るゝしよ先る事と志し通るゝ

そみよわら

一 身流るゝつゝもやいなりり

○今梅

夏虫の身流るゝつゝもいぬれりり

やまといひてな〜とてぬといひ終はぬ者ハ必とつてに
とあはれ〜とてなり竹を物終よおし〜とてあつたり
ふふあつたりきととやいひて〜とてぬしかゝるものふ
にあ〜と今止修習の弁は人の心よあれやいせぬ
とていふより波集後撰の物終よとてあつたはる
詞あり後いし〜とてなり

一 梅の冬よりとらつ〜とてなり

○今梅古今よ

一 来のらよりとら〜とて梅の影なき心つ〜の終はぬなり
たふて終をり〜とたれぬ明〜とていひての終はぬ神あり

○今葉え彌集よ人の心〜とていひての終はぬなり

又の日

こ歌源とゆり〜とてぬり〜とていひての終はぬなり
詞終をりよは初の句はよはとて終はぬ向ふよわき〜とて
ゆり〜とていひて〜とていひて〜とていひて〜とていひて
あま〜とていひて〜とていひて〜とていひて〜とていひて
も〜とていひて〜とていひて〜とていひて〜とていひて
〜とていひて〜とていひて〜とていひて〜とていひて
〜とていひて〜とていひて〜とていひて〜とていひて

清奥云

み〜とていひて〜とていひて〜とていひて〜とていひて
か〜とていひて〜とていひて〜とていひて〜とていひて

是はてふとてのふかかれしとされたることと通に思ふ
奇がしむ式部とくしよあをてあやしけふま
りされしをれとてふといた人かかれし拍あか
け事とて成りてていれむる事しよあてひとて
いふ奇しむんやいし奇の例といふことしよ
遠へらまはあし

一 わげくもあそようれあは清るんいあうるしとて
○今梅新古今急二 後徳大寺た大臣

よあてはなまうたりとがふしとをいあそよめとていあは
徳政を改ち臣

男よとくまの面影も清るんあまのりしとていあは

一 く甲くろめつみとしる

○今梅拾遺集よ東三條を改ち臣もあ

大原地つあされつみとてああはしとていあは
みよとてふとて改ち

是改ちり用しとて

一 びあけまうとて

○今梅輕 日本紀 無禮 一カ葉

何狂言
嘯曲字也

○今梅万葉は狂言はまうとてまうとていあは

○今案わさし人の白紙切てしむる
一 さらりかきし色はしらり人よむしけしむる
細柳をわたりひくくかたしむる

○今案さいらの人かたより我きかたしむる
かた人よはえむしけしむる
一 さらりかきし色はしらり人よむしけしむる
呼女之の方へ深のあらむかたしむる

○今梅はけしむるもかたしむる
かたしむる
一 朝メとく人よむしけしむる

夏の日は胡夕よりかたしむる

○今梅はけしむるもかたしむる

かたしむるもかたしむる

一 いまはけしむるもかたしむる

○今梅はけしむるもかたしむる
いあとしむるもかたしむる

一 かくとこしむるもかたしむる

○今案作物所

一 かく年とせむしむる

○今案拾遺よ

一 だのあつと云ふ人と云ふまじしは世あまうらむ
まゝひたされぬ

摩訶毗盧遮那の御誦經ありと云ふ

○今按摩訶毘盧遮那の法華經一巻六十一日
經ハわゝいよ彌と云ふ經ハわゝいよ又抄よ久日經の題
號ハ久毘盧遮那神變加持經といひる神變の上
よ成佛乃二字為と云ふ

かゝる本

一 志してしけるまじらん

○今按又母小しけるまじす命もかひなくまじ
不孝の罪もまじく危死のまじと云ひてありふとそめ
心とてと云ふ

一 ちのあましはありのひのあましと云ふ

細抄改少し成ぬ危あまのまじ
抄是のまじと云ふと云ふりしと云ふ

○今按よ何事法と云ふは今ひた死ハ海と云ふ
いふよと云ふと云ふ細流の所流ハ叶と云ふ
一 なるもとらと云ふねと云ふ世ハ

河うしとふにひよぬのかまぬ流るるをいれぬれはふ^止所
○今梅六作茅に眼影は作者なり胸句おもしろくは
少き方丹家集は源氏の河也といましりたりや
わこのこすたうとといひくまれもらるるのまじり
れくゆとふと成けふもねまもしこれも十年の
のらああらたなり

一 ちかくほもれくちなりつる方なりと
細程魚とと成るるにせむあまきとらう
○今梅は程石下細かくおし方成りてあれゆらん
うとれしつらなるもねもれまひよりおらうあ
病とらなるもはとらうなり

一 今いそもえいじ標としもあまにえんせいの程ゆらん
河いそ成も後とまふくせしめえいそあつたはとれ
○今梅世ういりよりあらう
かゆものまもしむいりわて

一 今梅は海むけしとよねいあやれるあつたを
まひしあふれしめとれつげれらとらう
くさるものあもらういふゆき人なゆ
ゆいしあやしなまひのあもかしくあつた
河いしひてまかぬ我あつたあもあつた

○今梅は奇河のりあつるふは梅はより後なれし
出和の奇は

おろしての海をなむいゝわいひの記をいひて今うらま
にかううの記をいひ

○今梅は日記よ

ふらしての海をなむいゝわいひの記をいひて今うらま
よふくまての記をいひ

孟世ふ 奇ふあはれき

○今梅下に取居の持り信がのりらよきとまこ
えとく記をいひていねをいひていねに取あは
しにふらぬきと取は記をいひていねに取あは

○今梅は奇河のりあつるふは梅はより後なれし
出和の奇は

○今梅は日記よ

○今梅は日記よ

○今梅は日記よ

残のいんてんてんかてんかてんかてんかてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんかてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんかてんかてんか

一 唯このころのいんてんかてんか

○今梅の葉芽二 人丸

わす川あてんかてんかてんかてんかてんかてんか

一 みこころのいんてんかてんか

○今梅のころのいんてんかてんかてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんかてんか

一 一とてんかてんかてんか

○今梅の葉芽のころのいんてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんか
てんかてんかてんかてんかてんか

一 一とてんかてんかてんか

○今梅の葉芽のころのいんてんかてんか
てんかてんかてんかてんか
水至清則無魚といふ言なり
一 春の柳のついでに

○今案

うひまの春いありてはさくらあはれとよほしけり
わやのけりりりりり

○今案親の病いりては異なりけりりりり
ひくぬいありては枝はさきさきりりりりり
花さきさきりりりりりりりり

○今梅丘今集はし河清一美案をたせよ

珠放者たまにけりりりりりりりりりり
同弁士よ

いひのれをいひては梅珠者初よりありては
そりりりりりりりりりりりりりりりり

何とせんといふらりりりりり

細梅丘いりりりりりりりりりりり
のせりりりりりりりりりり

○今梅丘はけりりりりりりりりりりり
我れ放すの習とありりりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりり
女たりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり

○今梅丘美

いせの海いりりりりりりりりりりりりりりりり

とりあがり

一 梅はたのうれや〜みかおる〜とすもぬゆ〜

○今梅上の句初めの二句おろしていらひ

をこれきい表をかくす〜此れわをてはる〜

河多集スナキ万葉潜同上

○今梅潜の字多集よ〜し〜く〜よ〜めり〜れ

理又ちまよた〜り

一 ぶよのとをえり〜後より

○今梅後拾遺よ 道細也

かゝるいふつをよせてこのとら〜月日とゆつまらる

一 せのうきつまた〜い〜あ〜よ〜あ〜

細流らふのさ〜系のか〜あ〜よのうきつ〜ん〜あ〜い〜

○今梅い奇行よ〜い〜い〜い〜あ〜い〜

一 かま〜い〜ふ〜あ〜い〜あ〜あ〜

細流〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜

○今梅是別集よあ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜

あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜

鈴ひ

一 法華のゆゑ

○今按法華の曼荼羅ハ觀智儀軌不空三藏翻譯弘法大師請來よとれり曼荼羅ハ梵語也ハ真言も壇とて翻と儀を合じ加多ハ梵語と用らるる當麻乃曼荼羅を信より六密經ハ法とりの曼荼羅と字を色て似るゆへに少る實ハ曼荼羅也ハわハ中并の書ハ淨土の變相と畫するといふ是より曼荼羅ハ四種の差別を伴善菩薩の形像をかく天曼荼羅ハ釋迦母の代ハ針曼荼羅より三摩耶ハ本誓の義あり學向と好む人の書法歟

ハ音樂と好む人の琴琵琶と行ふといふおのく新得の法門と物成りて表ハ法より梵字のよて種子とすとハ法曼荼羅といふより梵字ハ羯磨曼荼羅といふより三種ハ圖と土法社やハ本願として佛像を作らる威儀事ハ有成就乃新と指て羯磨曼荼羅といふ羯磨とサハ事業業と翻とるあり

一 けりしのはら

○今按挾侍菩薩日本紀

一 經ハ六道の衆生のくふ方部がせ法にて

○今按定家御母のそめいしハ法華經

一 六部書よりハ是よりハ流ひけり

何計又壞

○今梅界の字派判

一 姉のみのりもけふ

○今梅多葉は勝の字派けり

一

一 中いけきけり

○今梅寛吻しす一丸の字派

云説文云唇吻上音旬久智比留下

音移久智佐岐良 くらさけのゆさ

一 一 梅のりまはいるみよそはわら

○今梅せり分りて喜式等八大殿

祝詞云取曾謝草乃粟岐古語云蕪々岐也

此れより倍よいとくまきとらけりとい

ゆりともよ葉の上はわらふをゆりてせり

のまふといふはたあつて

一 一 今この秋といふしとあつて

○今梅始とと源氏のついでに

さひのゆきといふ源氏のゆき

ありとの向源のあつて

一 一 今て草花のり

夕霧

一 どのほつらうきりかへしにわてえまうてとつひは
とひよりみこり

細伴舞お終なわていきてわんごまりいとるこ
なしよんかふ魚一つわてまうていこ

○今梅志わてえまうて流るひらふな用へし終
お終のわていきてい將[#]てまりひまわてゆんがれ
ふにかのまけんもひてもぬうまかまひめひまひ
なまとし中より下り流てあわてしすまれのりし
字底を流るる物一

一 わるくのせうそかふ流るとこ一と流る流るは

細流島町の湯方程をまじし

○今接湯島新の夕暮のせうとこの節ありて
せとれはくはせうとふい人してあさむいふわ
らひなり

なつとれわされ

細流の湯をせうと

○今接湯島新の夕暮のせうとこの節ありて
せとれはくはせうとふい人してあさむいふわ
らひなり

和泉式部

今接湯島新の湯方程をまじし

夕暮の河と心と暮暮してよくおぼる

やらくを流す

河邊 日本紀

○今接湯島新の湯方程をまじし

花今接山城國愛宕郡之内小野郷上賀茂領
栗栖郷ハ社領也寛仁二年十月廿五日陳定あり
て官符改ふれとらぬくは此の庄道とて六
此所ハ又宇治と小野栗栖郷とてふふあり

○今接三代実録正六同四十二云愛宕郡栗栖野

かしつて和名鈔第六云山城國愛宕郡栗野久留小野
研宇治郡小野研小栗留須花名の流これ木か
常曉和尚栗栖法琳寺と建て太元法と流ひ
解小栗栖常曉といひす研宇治ありいふとい
只くろと此といふとゆゆよはとくろす栗野
かきて久留須と流ひ研宇治ありいふとい
に栖の字ふまひ二字に限て名残研栗野なり
為柴集栗野なり

一
りく小くすけけりいひよ
こよゆか大和そ又別あり
はく杉のふと此地の存りむちりし時いままにひ足

河君ふるうらいらく栗野いひよとせぬあやむら
幾用此音

○今按れは後拾遺志栗野はあやむら式ア音なり例は
ひもやとあまよはた無栗野ひ及家名柴

一
又音根好忠音よ

一
月くほり栗野いひよとせぬあやむら
幾音いふれも流るやう物く西白
○今按うは音のいひゆのいひよとせぬあやむら
といひ又栗野いひよとせぬあやむら

わらわはよきまひすゆかやひてらにぬらら
うきうにたり月くあまのすれれしみの音はれ
い霧ふとほまれとていれ又月をこやゆて音はるき
時いらしむわ事とてまもる業をすらり

うきまの取方のたはて音のよてれた月取のれいあう

一 わらわの病のあつらんあ

○今梅古今

何とて身めらうふ老の年あかしくもあ
六帖

いって程をきかせしむぬのねらあかしくもあ

一 かりあかしくもあ

○今梅夕暮のまあ人あうきまはあまのまをせし
影をえあうきまの

一 ぬきまぬかえあを流し

○今梅拾遺
口信家

わらわとてあか人のまをきかすてぬきまぬか

一 人くわらししむれまにえりこえ

細何れもあまのあ人のまをきこしとあ

○今案をいしむは女屋をたては清き所へい
しむくし細流のまをきこしあかまをきひま
やうあ

一 わらわしむ何れもあまをきこは

一 一々中ねんより蘭より一紙くやじりくありけ
しつしつめいせむとていふこと

一 ○今梅屋葉の物とていふはねね一々なより
いふはけいこはぬまえらうの流るぬこと

一 一々せじおちいなる所らういふ
細夕暮社へんやとあはれは津島市のらり中一
いふはけいこして下流は入らう

幾時時夕暮のおと一はけいゆんてみせと所を
流るくらしなり

○今葉とれとる葉の流るのよらうて夕暮とら流
流るくらしなりとていふはせぬぬよりいれせ

流るくらしなりとていふはせぬぬよりいれせ
流る所の流るよりしてゆくとらて下流はよふ
あはれ味くふゆ

一 けしつとをけしつやうなむ一々いふとあり

○今梅けいこはる女二の必死あはせてきたま
あはれきまぬとていふ

一 けしつとをけしつやうなむ一々いふとあり

○今葉夕暮の奇なりては是所のらり中一
女二のくはれと流るよりとけいたまふら
あはれとつまれまといふとあり

○今梅さるの表とる流るよりとていふとあり

いかに奇談おこせて又替の入りしはつてある
事いありしはひとてあめはしりし
推してられとておひしはひはつとてせねと
いみしとておひしとて

一 かくおきれのあふしゆりくんに

今接百葉第十六

十人のえり

石傳云昔者鄙人姓名未詳也于時郷里男女衆集
野遊是會衆之中有鄙人夫婦其婦容姿端正秀於
衆諸乃彼鄙人之意弥増愛妻之情作此歌讚嘆美貌也
之し此事なりとや

一 をこつりうんぬん

河誘ヲコツリ 壺ヲコツル

細料ヲコツル

○今接誘ハ日本紀よをうりかともわつるまよ
先くすしとわさじくうる壺ハ舒の訓はれあ
くのみとありをこけとありはゆるもあは細
流のほけひとてとて六帖又思楨とりと歌
わさ人のこつり 壺のあやなけひとてあは
おほりけよあはつてやとてあはつとて
或注たすにおひあつてのめよあはつとて
○今接けはけしおあらもよこあはつとて

とくしつちり

あつてくして

河あつてくしてのり

○今接あつてくしてのり
あつてくしてのり

わつてくしてのり

○今接和名云説文云鞍音安字或作鞞和名久良馬

鞍也 厄大将朝光 二

ひつちりあつてくしてのり
あつてくしてのり

○今接驚駭イハケテ日本紀イハケテ喘息イハケテ目上イハケテいふけいともあ

と同一くくしてのり
あつてくしてのり

○今接世奇イハケテ何イハケテあつてくしてのり
あつてくしてのり

世中といふくしてのり
あつてくしてのり

けりあつてくしてのり
あつてくしてのり

けりあつてくしてのり
あつてくしてのり

命とくしてのり

河のほとりへはあすまののりかへにおもひおもひのりたる
○今接ぎのれは今也

命ふまはふれはあすまののりかへにおもひおもひのりたる

あすまの命はあすまののりかへにおもひおもひのりたる

是首のよ下句とあすまののりかへにおもひおもひのりたる

くはあすまののりかへにおもひおもひのりたる

一 花やあすまののりかへにおもひおもひのりたる

○今葉相あるは

この花やあすまののりかへにおもひおもひのりたる

いしあすまののりかへにおもひおもひのりたる

○今接ぎのれは今也

あすまの命はあすまののりかへにおもひおもひのりたる

一 今接ぎのれは今也

○今葉相あるは

この花やあすまののりかへにおもひおもひのりたる

一 今接ぎのれは今也

○今接ぎのれは今也

あすまの命はあすまののりかへにおもひおもひのりたる

一 今接ぎのれは今也

○今接ぎのれは今也

あすまの命はあすまののりかへにおもひおもひのりたる

一 今接ぎのれは今也

一 とうとうとたかおま

河村の取柄有のえし清きいらくぬの山とさえぬ屋あり
細川奇よなひくら記取とま海しきいり

晴川宮不來とらめふらわらわらとくむ奇れ
ぬの山ととらふとひをうや然い面白哉

○今梅新古今秋よ影し

大に千里

つくよとひの月あふ今とらぬの山とさえぬ
世奇こむの月とさぬの山とさえぬ
り秋池し後撰集雑二業平

人井川ら舟のからと大よとらぬの山とさえぬ

續後拾遺秋下

足別

一 梅のさくらこれしほやとれとさえぬ
としましよまけあし

○今梅新葉の芽

一 わせこといしゆあしはれ行のそいふ新古今
がつみくちいりといそかきんからす

○今梅よふらふらつとやしほひつらんあかく
あひあかまほひつとそみとれしつあ後めを
つたむね波奇のいよそふらふらつとやしほひつらんあかく
あひあかまほひつとそみとれしつあ後めを
あひあかまほひつとそみとれしつあ後めを
あひあかまほひつとそみとれしつあ後めを

一 あつたてんあやこ

孟卯の身いあつたてんあやこはあつたてんあやこ

○今按は川舟何よあつたてんあやこはあつたてんあやこ

たぢぢのあやこはあつたてんあやこ

玉葉集恋五よ朱雀院御時入内の後いあつたてんあやこ

あつたてんあやこ

女御藤原慶子

あつたてんあやこ

一 いほよのあつたてんあやこ

○今按はあつたてんあやこはあつたてんあやこ

あつたてんあやこ

假名あつたてんあやこ

一 あつたてんあやこ

○今按古語拾遺云天鈿女命古語天乃於須女其神強捍極固故以為名今俗強

志此縁也 女謂之於須 あつたてんあやこ

あつたてんあやこ

一 あつたてんあやこ

○今按蜻蛉日記云たぢぢのあつたてんあやこ

あつたてんあやこ

あつたてんあやこ

あつたてんあやこ

あつたてんあやこ

まをひけられしはまのむらさき...
ゆたなき...
あふのれ...
ある君...
一

○今梅より不...
一

細...
一

○今梅...
一

乃...
一
○今梅建春門院...
一

園路...
一

九 権大納言隆季...
一

あ...
一

石膳 清補朝臣...
一

浪...
一
九...
一
中...
一

あゝ一山ならぬまう糸の弱より奇蹟の窟と
いふと巖の口よりゆいづの事なきに相坂のまゝ
岩の口よりゆいづん文よとらあしとまよひ給へとのり
よあまてらさかやうよりゆいづり石と

感状の云又良暹或所謂云一日江州より上洛之向
於會坂時雨よ逢石門よ立入テカシコク又レス云
是優艶義族而懷圓回云関石門ニ河極立入哉
内ゆえに懷圓咲テ其石ノ窟ニテ待不知給歟不
便と云良暹の口懷圓度ノ蒙難者也但為仲
哥ニアツニチノコトツテヤセシホトキス ぬ廿有石門以又彼
失歟セキノイハカトイニクツルナル

互接續拾遺集巻六のいそ一浪ハをばやうや
Pつりりる人のあゆよ 紫式部

かゝりておのいそや岩がたふまよりなほ
これいそをの哥石窟今の夕方の方と為仲
乃哥と石門也言遠の哥とて石門せんきひ
しとくおのいそつりて別り河なりり
きも難をなす

一
すんいそやま
今梅夫初物終よ

あゝいそはけりともよめ月えけりよとわが
あゝ 玉葉志二 真風

一 為し今いかに... (faded text)
 一 淨らせおふりけおとなくすもつはりにくけふ
 なもまといえうとみ... (faded text)
 ○今接後撰忘ぬし一條の... (faded text)
 こいひをりけさらぶら... (faded text)

一條

一 悲くいけ... (faded text)
 伊勢

一 かくらと... (faded text)
 細夕誓の詞へ 孟同

抄夕誓乃詞... (faded text)
 今葉... (faded text)

一 かうく... (faded text)
 細神... (faded text)
 唾濁りて... (faded text)

一 ○今接神... (faded text)
 俗よ... (faded text)
 おい... (faded text)
 細直よ... (faded text)
 孟... (faded text)

○今梅がわらうといふ人々も信は尋常な事なれど
いふまがらふ處一あつたの洞井に物候を治給はる
といふ事とせしめあはくはるよかむしてすけ
おほいめとうみんしりい

○今梅が紫よりいふは穢の字はかり垢つま
てありさるるなり又文字人とうみりしとさす
あまの中我とほさるるは魚一ならやうすと
いふもよくかまひ
たしぬまはくくつしりり

○今葉古今よ
わらぬやうにそらわひぬにふまはくまをさす

一 毎かおんごしぬぬれらふよさすしりりしり
男とあつたかせ

○今梅巧ましかれたしほより
いしりりしりけふ

○今梅河海は葛葉をすしは盤城とあつていしり
さよありあはれ不動のりなりとあつたぬさし
彼奇ハ

盤城はあつたるを磯邊のこねはははれ我ますしり
ふれは名前と回并すしり

さしあつたるといふ石塚もこのさしりりり
此石塚の墓の事と日本紀よ石擲これりりり

御法

一 なることありしひがめとけりてこの世は福も法もなき

○今梅捨遣集がきよ 中納言朝忠

自然の初めとまふと行おきて今ゆきすまの世をさうん
けし哥をねりし歌

一 くららの世を笛の音よきららぬて他して

○今梅百千鳥の書葉第百十はよ

我のよえのこころいじ百のきららぬれとまの世は
これの百ののきららぬれとまの世はさうんまの世はさうん
たふらぬ時千鳥のれとまの世はさうんまの世はさうん
さうんまの世はさうんまの世はさうん

いよは免れぬるりお東武部とのきららぬのひのわさうん
まの百ののきららぬれとまの世はさうんまの世はさうん
後と信をまの世はさうんまの世はさうんまの世はさうん
奇よさうんまの世はさうんまの世はさうんまの世はさうん
よやとまの世はさうんまの世はさうんまの世はさうん
思ひこらさうんまの世はさうんまの世はさうんまの世はさうん
ぬらまの世はさうんまの世はさうんまの世はさうんまの世はさうん
又梅百千鳥の書葉第百十はよ
みまののぬきけりておのしんく

○今梅陵王の年と感して見おのくもまの
ぬらまの世はさうんまの世はさうんまの世はさうん

一 今夜いともなれ方らりしてひいひいなりや
○今接

一 かしらおとくしはりて

細花島中宮の御所といふこれ六條上の御所なり

○今接よむ今めなひはなすけきん

六條上の御所といふこれ六條院の東對面なり

下し ありて ありて

まふしりておとくしはりて

六條院より上への御所なり

乃市里すも也世業上の御對面ありて此と病中なる

くさる所は二條院へ又中宮の行路ありてこれ

よふれし花島の御所なり

六條院より上への御所なり

給りて中宮の御所なり

さうへは御所なり

より中宮にて御所なり

くさる所は御所なり

御所は御所なり

より中宮の御所なり

くさる所は御所なり

くさる所は御所なり

○今梅白のまじり葉上のそとそとを流ひを影
しつゝのやい申ま流ひをまじりて流ひて葉上
酒にけしむるやうにわびし流ひを

一 さらばあしむらうと流ひをまじりて流ひて

○今梅六帖

吹くれいあもーんさる風をいりて流ひを

一 今いらくま道

○今梅法華經等の徒真入於真のんてあもり或
り寄を孟津より流ひをいりて流ひて葉上
同時の人をいりて流ひをいりて流ひて葉上
こしむらあの下に流ひをいりて流ひて葉上

○今梅上は源氏の今いらのくまみらのこりひま
たのこりあもり流ひをいりて流ひて葉上
一 志よるあしむらうと流ひをいりて流ひて葉上
わりあもりいりて流ひを

○今梅とゆらんの流ひをいりて流ひて葉上
疾散よるあしむらうと流ひをいりて流ひて葉上
寄よるあしむらうと流ひをいりて流ひて葉上

一 疾けいあもり今いらのくまみらのこりひま
孟源のゆらんの流ひをいりて流ひて葉上
一 流ひを

○今梅たぐわまのせしむる梅と飽よるて

乃世のつゝお小あまをばらへ

一 けりりい 雲舟かゝも世のこころをわらへぬのさか

○今梅上句は紫上の魂のゆゑに秋のあけぬる神

さうとつゝを神魂の天小神のつらうも紫よまをさし

る日ちく秋のあけぬるこれなり秋好中宮のから

世は紫上といふことねりて秋よ心をさめさうり

わよよみあつらふ同心して梅をおとてよみ活らん

と秋好のゆゑにらひまをわける秋のあけぬる

不汝梅とまをさしてよめは秋好の用をさしあつ

幻

一 こつやといひぬりてよめと人をれ何よまのあまうらん

○今梅後撰よ

かあさ苗をさそめつらう白の魂をさす中とまをさし

手紙を免てはれぬるいひさるるのあけぬるといひあま

○今梅後撰よ

年加へてまのなほおまをさしいひわらさるるをさす

六帖

こころをわらへぬるいひさるるのあけぬるといひあま

同

新恒

わらはぬる秋のこころをわらへぬるのあけぬるといひあま

重之集

一 花をばらばらと散らししをばらばらと散らす
とれりゆよとてやばらばらと散らす

○今接古今よ

一 山をばらばらと散らししをばらばらと散らす
神のまゝとせられたりて

細わす川に流るる水は神のまゝとせられたりて

○今接世行のまゝとせられたりて
下り向つき急流に流るる水は神のまゝとせられたりて

貫之

漏川の水とやけき世に流るる水は神のまゝとせられたりて

一 梅のまゝとせられたりて

かのゆかしのまゝとせられたりて

河をばらばらと散らししをばらばらと散らす

○今接世行のまゝとせられたりて
花をばらばらと散らししをばらばらと散らす

一 花をばらばらと散らししをばらばらと散らす

花をばらばらと散らししをばらばらと散らす

○今接世行のまゝとせられたりて

一 花をばらばらと散らししをばらばらと散らす

花をばらばらと散らししをばらばらと散らす

一
ことしは...の...
細よる...の...
便の...
てい...
こ...
か...
流...
敷...
いた...
ひ...
故...

僻案抄...
○今...
身...
か...
塚...
これ...
と...
親...
神...
事...
水...

をばいとおりのかゝるこゝろに用ゐるなり

史本抄正字よりうらた祭りなるに人のあつたりはつ

りしり奇のせきり
水泉式部

神はけてま

よりなる水といひる

又神中抄第四古奇

神のまじりたるまじりたるあはるのまじりたるまじりたる

奥寂抄とありたりは神のまじりたるまじりたる

又送経母の奇

あまのりかゝるまじりたるまじりたるまじりたる

かゝるまじりたるまじりたるまじりたるまじりたる

乃とていへ神のまじりたるまじりたるまじりたる

よ同きまじりたるまじりたるまじりたる

多葉集第六七小みふりしとて先ずと水占とて

又嘉應二年十月住吉社歌合は社頭月といふ歌

清輔朝臣

月影をほろふりれ神をよめる水はほろかわる

判者後成の云らるる水の氷といふり浮舟の舟舟

かもの系り見し奇よほろふりたる水はほろく

おろしあつたりたるまじりたるまじりたる

ゆゑは水とありくうけ給はるるまじりたる

しるまじりたるまじりたるまじりたる

まじりたるまじりたるまじりたるまじりたる

てよりの水はひいて月をばらばらにわけて見ればや
いくと云く此が法補給信の云と海魚のうらひいせ
の社やとゆふまじと又新よよを致すの源氏のこ
よわくは和泉式部集ありは後をばらばらとやま
い何ぞ後滅つても後をばらばらと月よよとまじまじと
わらとあまてよりの水はひいて月をばらばらとやま
られまじり海の水をいづれは社をまじまじとやま
同くは海をばらばらの水はひいて月よよとまじまじと
乃つとまじまじと和泉式部の新よよとまじまじと
らよよとまじまじとわらとあまてよりの水はひいて
よよとまじまじと神水と飲てお云ふあり日本紀

敏達天皇十年春閏正月蝦夷數不冠於邊境由是召其
魁師綾糟等詔曰云於是綾糟等懼然恐懼乃下泊瀨
中流而三諸岳漱水而盟曰云臣等若違盟者天地諸
神及天自靈絶滅臣種矣 河勢物語

山城の井ののりよふくみく
中誓家集

神水は影をかかぬ山をさかかぬあまをわねやま
これよりののりよふ山頂の頂うらひいせ
影のこゆは強様の声とあまをわねやま山頂よりの
よら神の地念うかかぬあまをわねやま
先づ死して少日本紀し荒の字強敵しし中誓家集

瓶のひらくして壺のさうにる敷はしる託着といふ家
もや神前之流に水とてき重し汁の純し流るは
祥て物云氷は用止けきし中ねる年の希はあよ
ひとさうりに置るる残れなひていふとさうや
いはるれはさす色にばきしものさうしひてあわり
てさうらひてまこゆけはらまこて

ふさいせひすそとせられもあひねやつみをばき
かひらうはらにおりてあうらうらうとさうあて
ふ強しあてさるは中将の身はたのしうはあけぬ
争はあははははは昔のらまうらうらうとさうあ
あはこころのあわらしくはあわらけぬかこの心を

一
はらとれらとのさす事よわく先はらうらんと
いさうてあひねやつみをしは強あてらふは
ほみおとさきとら捨遣はふと條入るのちあはさ
つすすれつをさあものさうらうらうとさう
屋し古はるも始終の心はよくはれるさう
いさうあはれをさすはさし許す

一
細いさうしてさうか行はた彭云らうはらひのさうをさ
○今梅は争何は出るさうらうらう
郭云きふはつるさうらうの死橋を今とさうらうと
○今葉古今
さうらのさうらうはさうらうらうはさうらうらう

一
はましくやとらふにすすまぬかこし海に雲は
細烟とましくる面白く我玉粒を吹く
烟ふくくすすすすすすすすすすすすすすすす
かしくふくくくくくくくくくくくくくくくく
盃かこしかこしかこし

一
今案を今秋よ致すは漢人より寸こて養一
虫ニ松虫三烟ニつと八そとつけと載るもい
次虫よ入るるかこし海きいりれくのはあ
續後撰集雜一云東北院の渡りこの水よ致と
よんゆり
此集式部

新とてとも我海おらひてかこし海き海の言れ

又千載集冬よ堰河院の沖時百首の奇なり
時のくれの奇 中納言國信

一
石まよはかこし海きいりれくのはあ
ことなひくかこつけ海にりけかこし海に
ありととととととととととととととととと

一
たかこし海きいりれくのはあ
○今梅七夕詩上露心別淚珠空落す露及明
朝誠不極いれくのはあ

一
今まこし海きいりれくのはあ
細今も身をなつて物と今よふくてもあ

○今按い川舟の夜今恋一

人の身もあつりおぼわいといふんらんしやわと
回恋み

身恋うとたなよまきえぬおぼれかくても海舟の舟を
いこその上の句は舟のひらりて一首よなう腰白は
うに今中てあつりおぼわいといふんらんしやわと
所詮は次の舟は舟のひらりて一首よなう腰白は
川舟の舟をいといふんらんしやわと

一 梅こや舟所のさるきめははら

春ゆきの命もあつりおぼわいといふんらんしやわと

○今按拾遺集久部屏風の絵は佛名のおわい

梅のよめくに導所あつりといふんらんしやわと
をいみするお

雷うき山海はおわいといふんらんしやわと

費之家集云佛名のおわいといふんらんしやわと

をいみするお

君れありかきお梅をいといふんらんしやわと

うめの花をいといふんらんしやわと

雲がくま

白宮

一 白宮の二つを先づ花の露よをほくしつら
うへに結ぶ

三 秋田のかりほのやうにやうてさる花の露よをほくしつら
るうのふらあとも涙よおほふ草よあつ

一 ○今梅は白ふふよつふていつうもよあつと
是れよすくきくよ

河みれぬのむねよすくきくよ
前頭更有葛條物老菊哀蘭之両叢 樂天

○今梅ひれける奇の貴之集よあり

みれぬの老とくじつに菊よすくきくよ
このまの遠くを樂天詩風用とくしつらと老菊は包と
とくきくといふかおとぬやえ物あ集よ

乞の菊草とくきくよ
これの樂て白梅用とくしつらとめつらあり

一 われららふとほくしつらとくきくよ
何交泰 日本紀

○今梅日本紀よ交泰とくしつらとくきくよ
なりひれける人といふかおつ

○今梅下今よ

今案我之源氏のおとせのにはよきと討さく悲しう

紅梅

一 ちくほのともあへん

○今梅あつれんわりのらんがら魚一わらんい末とけ
を移しひなを色いよよとて母もわらうとふもは遠ひ
けしん吟味すべし

一 けらきくのちくほとていまちめさくぬきいぬりけの
命なきあつれしやとせにほえぬき

○今案我之源氏のおとせのにはよきと討さく悲しう
昔もあつれしやとせにほえぬきいぬりけの
ちくほとていまちめさくぬきいぬりけの
命なきあつれしやとせにほえぬき

うきいひあそびのけんすしんの意あり
きりえをうさんしん

○今梅をいひの侵凌せしむるは、
けしふむしんとのさるる

○今梅阿難の光と称するは、
はらけしんをいひの阿難と佛
とんをいひの源氏のかみとして源氏と
あふふのやうにわらわんやう
うみてり後あし

一 紅のみよりして

河紅のみよりして梅りれきんしんふ白くうりる 後撰

○今梅は川流へり奇きなり又源氏とてとあり躬恒の
奇之得るの帖より舞之奇なり躬恒集あはさくして
黄之集にあり皆欽の後撰と同一又後拾遺

之補

梅の花よりしてふはやくしんうすくをさるはけしん
わく人よせんか

河化人 日本紀 越人 孟子

○今梅日記に化人といふ半船一孟子小又越人か
爰家の書集に後り字化の字とあり

一
もやうのふゆの雪の神やれし花とえさのぬきやらしん
花もさのふゆの雪の神やれし花とえさのぬきやらしん 兼輔集
○今接し給ふ可兼輔集のふゆの雪の神やれし花とえさのぬきやらしん
つたふかあり

竹門

一
とらぬものらしむる

一
よきふてらりきくをさやらしひんかたの梅のふゆ

○今接し給ふ 兼輔法師

かたしをさやれぬかたの梅のふゆ

後撰よ 新恒

いせの梅のふゆの雪の神やれし花とえさのぬきやらしん
ふゆの雪の神やれし花とえさのぬきやらしん
こよふの梅のふゆの雪の神やれし花とえさのぬきやらしん

一 女よ日の比梅の花さくらあんに

○今梅も今の月やあぬのこまどうりさきわ

一 けしきも風はひのこいれあひりていそあきあひていへ

○今葉も家も葉も

あけぬはらひらひらとれたよけあひらひらとれ

一 梅死にひあきいよらうこいあひらひらとれ

○今葉上向うは今もあけぬとれあひらひらとれ

あやこいあきとれりらよあき

一 われらひらひらとれあひらひらとれあひらひらとれ

○今梅世帯よはあきあひらひらとれあひらひらとれ

あひらひらとれあひらひらとれあひらひらとれ

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

えんい又藏人少将の哥

いさよのあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

藏人の哥ハ先のりあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

一 水乃ほとりのるは昔ぬりらる

○今按石上題詩拂緑苔 樂天 乃丹家集

川上のがさのいよけとあまのきと庭やあまのきと

一 なられてのたぢしやうれ行川よあまのきとあまのき

○今按たのめいこのことあまのきとあまのきと

今憑也人乃かこもたのじろく人たのめあまのき

字さるたのみに我ころよなうれてはけりやま

をたじらるむあまのき行若うらやまらつる

へ新詞をう

一 海前の庭めておしをり治りたのきたいとん

あかくいくまぬくぬゆじらたやあまのき

今按新古今雜下よ久に奉周けりて殿上

ゆうして草深ま庭よおりておしをりて

草深まの

草よけてま庭の種のをれよはく海の前を

草深まの家集よとあまのきとあまのき



